

遺族会活動を始めて

佐川町 澤村 幸子

私が勤務している図書室で、必要な本を探しているときに本棚である本の題名が目にとまりました。「語り継ごう 元戦士たちの証言」という本でした。

本の帯には、「戦争なんてものは人間のすることではないぞ」「戦友が次々と散っていくなか奇跡的に生き残った元戦士たち、その彼らが語るありのままの戦争体験記。これは、彼らが私たちに残した平和への願いだ。」とあり、読んでみたいと上司に貸し出しを願いました。

なぜ、この本があるのだろうと不思議に思いましたが、読み進めて行くうちに体験を証言した方が、その施設の関係者だったことを知りました。遺族会活動をしていなければその本を手

に取ることはなかったかも知れないと感じたことでした。

本には10名の方の戦争体験記が載せられていました。「国家の罪責」「それでも生きていたかった」「死んでたまるか妻も子どももいるんだ」「海に消えた戦士たち」など心を締め付けられるようなタイトルが並び、読み進めるには心が痛くなったり、涙が出てきて読み進めることができなくなることもありました。でも知ること、英霊の方々の思いを少しでも感じ取れたら、体験記に寄せられた方々の平和への強い思いを感じ、これからの自分自身の遺族会活動での思いの底の部分に足していきたいと感じています。

悲劇 腹の底から戦争への怒りがこみあげて・飢えと闘いながら逃避行・それでも生きていたい・終戦 地獄の日々から生き残る・捕虜生活と戦犯摘発・遂に故国へ」と戦争中の森本様の証言は進んでいきました

私は令和元年に日本遺族会青年部 戦跡慰霊巡拝に参加させてもらい、フイリピンの慰霊巡拝に行きました。フイリピンの地図を何度も見たりしたのでその位置関係とも考え合わせながら読みました。証言の内容はほんとは悲惨で衝撃的で涙が止まりませんでした。

「出征の際に決死の覚悟をしていても、『いつになってもいい。幸運を得て生還できたら、どんなにか幸福だろう』そんな思いを心のどこかにそっと抱いていた。」とはじまり、末筆は「船上の人となり、ルソン島を離れ故国へ向かう胸中は万感の想いであった。癒

しがたいほど胸を締め付けていた望郷の想いが現実のものとなった喜びと、一方ではこの戦争で出会った幾多の無為の死に対する怒りがよみがえった。徐々に遠ざかりつつあるルソン島に無数の屍体が草に埋もれ朽ち果てていくことを思うとたまらない心境であった。戦争は地獄よりもっと残酷で非常だ。『もう戦争は、絶対嫌だぞ』と心の中で絶叫した。」と締めくくられていた。

文中に「ルソンの自然は毎日のスコールがあり全身水びたし。自然の猛威を恐ろしいと思いませんでしたが、それにもまして空からの爆撃、地上での銃撃。まさに地獄でした。人間の世界のこととは思えませんでした。それでも私は死んでも良いとは思わなかった。確たる希望を持ってない生と死の狭間でも私はただ無情に生きていたかったのです。その想いは、終生語り続

けようと思っていたのかもしれない。」と筆者は書いていました。

語り続けてくれることを私たちは受け取り、知っていくことの大切さを改めて感じました。高知でも先月の新聞で土佐清水市で特攻の地や語り部などを予定しているという記事が出ており、行ってみたかったのですが、勤務の都合で叶わず残念に思ったことでした。知らないことばかりなので自分から動いて知ることを積極的にしていきたいと思っています。

遺族会次世代の会での忠魂碑の清掃活動でも色々話を伺う機会がありますが、自分の住んでいる地域のこと、もつともつと知って自分に来ること、働きかけていくことなど地域での孫・ひ孫世代の役割も考えていきたいと思っています。遺族会の先輩の皆様にも色々教えてくださいたいと思います。

今、私は平和に暮らすことができているますが、世界に目を向けるとあちこちで戦争や紛争、核問題など沢山の心配があります。どうか世界が平和でありますようにと祈るばかりです。

引用「語り継ごう 元戦士たちの証言」

令和5年度発行

「高知県フィリピン遺族会だより」より寄稿